

受験番号「 」 氏名「 」

受験者は、配点の基準を選択することができます。	A	①	40点	②	40点	③	20点
下記のA・B・Cの内から一つを選び、その記号を	B	①	60点	②	20点	③	20点
○で囲みなさい。	C	①	20点	②	60点	③	20点

① 古典文学

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

\* 良岑よしみねの宗貞むねさだの少将、物へ行く道に、五条わたりにて雨いたう降りければ、荒れたる門に立ちかくれて見入るれば、五間ばかりなる\*檜皮屋ひだやの下に\*土屋倉ひだやなどあれど、こゝに人などもみえず。歩み入りて見れば、階はしの間に梅いとおかしう咲きたり。鶯も鳴く。人ありとも見えぬ御簾のうちより、薄色の衣、濃き衣うへに着て、丈だちいとよきほどなる人の、髪、丈ばかりならんと見ゆるが、

よもぎ生ひて荒れたる宿を①鶯のひとくと鳴くや誰とか待たんとひとりごつ。少将、

来たれども言ひしなねば鶯の君に告げよと教へてぞなくと声をかしくて言へば、女驚きて、人もなしと思ひつるに、ものしきさまを見えぬることと思ひて、物も言はずなりぬ。男、縁にのぼりて居ぬ。「②などか物のたまはぬ。雨のわりなく侍りつれば、やむまではかくてなむ」と言へば、「大路よりは漏りまさりてなむ、ここは中々」といらへけり。時は、正月十日のほどなりけり。簾のうちよりしとねさしいでたり。引き寄せて居ぬ。簾もへりは蝙蝠にくはれてところどころなし。内のしつらひ見入るれば、昔おぼえて畳などよかりけれど、口惜しくなりにけり。日もやうやう暮れぬれば、やをらすべり入りて、この人を奥にもいれず。女くやしと思へど、制すべきやうもなくて、いふかひなし。雨は夜一夜降り明かして、またのつとめてぞすこし空晴れたる。男は女の入らむとするを「ただかくて」とて入れず。日も高うなればこの女の親、少将にあるじすべきかたのなかりければ、小舎人童ばかりとどめたりけるに、堅い塩さかなにして酒をのませて、少将には、広き庭に生いたる菜を摘みて、蒸し物といふものにして茶碗に盛りて、はしには梅の花のさかりなるを折りて、その花びらにいとをかしげなる女の手にて書けり。

君がため衣の裾をぬらしつつ春の野に出でてつめる若菜ぞ

男これをみるにいとあはれに覚えて、引き寄せて食ふ。女わりなう恥づかしとおもひて臥したり。少将起きて、小舎人童を走らせて、すなはち車にてまめなるものさまさまに持て来たり。迎へに人あれば、「今またも参り来む」とて出でぬ。それより後、たえずみづからもとぶらひけり。よろづの物食へども、なほ③五条にてありし物はめづらしうめでたかりきと思ひ出でける。

(『大和物語』より)

注\* 良岑の宗貞―六歌仙の一人、僧正遍昭の俗名。

\* 檜皮屋の下―檜皮屋の裏手。檜皮屋は檜の皮で屋根を葺いた家。

\* 土屋倉―土蔵。

問一 傍線①「鶯のひとくと鳴くや」について、次の各問に答えなさい。  
1 「ひとくと」は鶯の鳴き声を表す擬声語とある言葉との掛詞になっている。その掛けられている言葉を漢字二字で答えなさい。

2 1で答えた掛詞を活かして、①を現代語訳しなさい。

問二 傍線②「などか物のたまはぬ。雨のわりなく侍りつれば、やむまではかくてなむ」を、「なむ」の後に省略されている語も補って、現代語訳しなさい。

問三 傍線③「五条にてありし物はめづらしうめでたかりき」とあるが、何がどうだったと言っているのか、説明しなさい。

問四 良岑宗貞が偶然訪れた「女」の暮らしぶりはどのようなものであったか、文中に書かれている具体的な様子に言及して、説明しなさい。

② 近現代文学

次のA～Cは、ある作品の一部である。それを読んで、後の問に答えなさい。

A

夜の帳ちやうにささめき尽きし星の今を下界の人の鬢かみのほつれよ

歌にきけな誰れ野の花に紅き否いなむおもむきあるかな春罪もつ子

髪五尺ときなば水にやはらかき少女をとめごころは秘めて放たじ

血ぞもゆるかさむひと夜の夢のやど春を行く人神おとしめな

椿それも梅もさなりき白かりきわが罪問はぬ色桃に見る

その子二十櫛くしにながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな

堂の鐘のひくきゆふべを前髪まへかみの桃のつぼみに経たまへ君

紫にもみうらにほふみだれ篋ばこをかくしわづらふ宵の春の神

臙脂色は誰にかたらむ血のゆらぎ春のおもひのさかりの命

紫の濃き虹説きしさかづきに映る春の子眉毛かほそき

B

従四位下左近衛少将兼越中守細川忠利は、寛永十八年辛巳の春、余所よせよりは早く咲く領地肥後国の花を見棄てて、五十四万石の大名の晴々しい行列に前後を囲ませ、南より北へ

歩みを運ぶ春と俱に、江戸を志して参勤の途に上らうとしてゐるうち、凶らず病に罹つて、典医の方劑も功を奏せず、日に増し重くなるばかりなので、江戸へは出発日延べの飛脚が立つ。徳川將軍は名君の誉れの高い三代目の家光で、島原一揆の時賊將天草四郎時貞を討ち取つて大功を立てた忠利の身の上を氣遣ひ、三月二十日には松平伊豆守、阿部豊後守、阿部対馬守の連名の沙汰書を作らせ、針医以策と云ふものを、京都から下向させる。續いて二十二日には同じく執政三人の署名した沙汰書を持たせて、曾我又左衛門と云ふ侍を上使に遣す。大名に対する將軍家の取扱としては、鄭重を極めたものであつた。島原征伐が此年から三年前寛永十五年の春平定してから後、江戸の邸に添地を賜はつたり、鷹狩の鶴を下されたり、不断慇懃を尽してゐた將軍家のことであるから、此度の大病を聞いて、先例の許す限の慰問をさせたのも尤もである。

將軍家がかう云ふ手続きをする前に、熊本花畑の館では忠利の病が革すみやかになつて、とう／＼三月十七日申の刻に五十六歳で亡くなつた。奥方は小笠原兵部大輔秀政の娘を將軍が養女にして妻めあはせた人で、今年四十五歳になつてゐる。名をお千の方と云ふ。嫡子六丸は六年前に元服して將軍家から光の字を賜はり、光貞と名告なつて、従四位下侍從兼肥後守にせられてゐる。今年十七歳である。江戸参勤中で遠江国浜松まで歸つたが、訃音を聞いて引き返した。光貞は後名を光尚と改めた。二男鶴千代は小さい時から立田山の泰勝寺に遣つてある。京都妙心寺出身の大淵和尚の弟子になつて宗玄と云つてゐる。三男松之助は細川家に旧縁のある長岡氏に養はれてゐる。四男勝千代は家臣南条大膳の養子になつてゐる。女子は二人ある。長女藤姫は松平周防守忠弘の奥方になつてゐる。二女竹姫は後に有吉頼母英長の妻になる人である。弟には忠利が三齋の三男に生まれたので、四男中務大輔立孝、五男刑部興孝、六男長岡式部寄之の三人がある。妹には稲葉一通に嫁した多羅姫、烏丸中納言光賢に嫁した万姫がある。此万姫の腹に生まれた禰々姫が忠利の嫡子光尚の奥方になつて来るのである。目上には長岡氏を名告る兄が二人、前野長岡両家に嫁した姉が二人ある。隠居三齋宗立もまだ存命で、七十九歳になつてゐる。此中には嫡子光貞のやうに江戸にゐたり、又京都、其外遠国にゐる人達もあるが、それが後に知らせを受けて歎いたのと違つて、熊本の館にゐた限の人達の歎きは、分けて痛切なものであつた。江戸への注進には六島少吉、津田六左衛門の二人が立つた。

三月二十四日には初七日の営みがあつた。四月二十八日にはそれまで館の居間の床板を引き放つて、土中に置いてあつた棺を昇き上げて、江戸からの指図に依つて、飽田郡春日村岫雲院で遺骸を茶毘にして、高麗門の外の山に葬つた。此靈屋みたまの下に、翌年の冬になつ

て、護国山妙解寺が建立せられて、江戸品川東海寺から沢庵和尚の同門の啓室和尚が来て住持になり、それが寺内の臨流庵に隠居してから、忠利の二男で出家してゐた宗玄が、天岸和尚と号して跡統あとつぎになるのである。忠利の法号は妙解院殿台雲宗伍大居士と附けられた。

## C

恥の多い生涯を送つて来ました。

自分には、人間の生活といふものが、見当つかないのです。自分は東北の田舎に生れましたので、汽車をはじめ見たのは、よほど大きくなつてからでした。自分は停車場のブリッジを、上つて、降りて、さうしてそれが線路をまたぎ越えるために造られたものだと、いふ事には全然気づかず、ただそれは停車場の構内を外国の遊戯場みたいに、複雑に楽しく、ハイカラにするためにのみ、設備せられてあるものだとばかり思つてゐました。しかも、かなり永い間さう思つてゐたのです。ブリッジの上つたり降りたりは、自分にはむしろ、ずいぶん垢抜けのした遊戯で、それは鉄道のサーヴィスの中でも、最も気のきいたサーヴィスの一つだと思つてゐたのですが、のちにそれはただ旅客が線路をまたぎ越えるための頗る実利的な階段に過ぎないのを発見して、にはかに興が覚めました。

また、自分は子供の頃、絵本で地下鉄道といふものを見て、これもやはり、実利的な必要から案出せられたものではなく、地上の車に乗るよりは、地下の車に乗つたほうが風がはりで面白い遊びだから、とばかり思つてゐました。

自分は子供の頃から病弱で、よく寝込みましたが、寝ながら、敷布、枕のカヴァ、掛蒲団のカヴァを、つくづく、つまらない装飾だと思ひ、それが案外に実用品だつた事を、二十歳ちかくになつてわかつて、人間のつましさに暗然とし、悲しい思ひをしました。

また、自分は、空腹といふ事を知りませんでした。いや、それは、自分が衣食住に困らない家に育つたといふ意味ではなく、そんな馬鹿な意味ではなく、自分には「空腹」といふ感覚はどんなものだか、さつぱりわからなかつたのです。へんな言ひかたですが、おなかが空いてゐても、自分でそれに気がつかないのです。小学校、中学校、自分が学校から帰つて来ると、周囲の人たちが、それ、おなかが空いたらう、自分たちにも覚えがある、学校から帰つて来た時の空腹は全くひどいからな、甘納豆はどう？ カステラも、パンもあるよ、などと言つて騒ぎますので、自分は持ち前のおべつか精神を發揮して、おなかが

空いた、と呟いて、甘納豆を十粒ばかり口にほはふり込むのですが、空腹感とは、どんなものなのか、ちつともわかつてゐやしなかつたのです。

自分だつて、それは勿論、大いにものを食べますが、しかし、空腹感から、ものを食べた記憶は、ほとんどありません。めづらしいと思はれたものを食べます。豪華と思はれたものを食べます。また、よそへ行つて出されたものも、無理をしてまで、たいてい食べます。さうして、子供の頃の自分にとつて、最も苦痛な時刻は、実に、自分の家の食事の間でした。

自分の田舎の家では、十人くらゐの家族全部、めいめいのお膳を二列に向ひ合せに並べて、末つ子の自分は、もちろん一ばん下の座でしたが、その食事の部屋は薄暗く、昼ごはんの時など、十幾人の家族が、ただ黙々としてめしを食つてゐる有様には、自分はいつとも肌寒い思ひをしました。それに田舎の昔気質の家でしたので、おかずも、たいていきまつてゐて、めづらしいもの、豪華なもの、そんなものは望むべくもなかつたので、いよいよ自分は食事の時刻を恐怖しました。自分はその薄暗い部屋の末席に、寒さがたがた震へる思ひで口にごはんを少量づつ運び、押し込み、人間は、どうして一日に三度三度ごはんを食べるのだらう、実にみな厳肅な顔をして食べてゐる、これも一種の儀式のやうなもので、家族が日に三度々々、時刻をきめて薄暗い一部屋に集り、お膳を順序正しく並べ、食べたくなくても無言でごはんを噛みながら、うつむき、家中にうごめいてゐる霊たちに祈るためのものかも知れない、とさへ考へた事があるくらゐでした。

一 A～Cのそれぞれの作者名と作品名（ただしAは歌集名）を記しなさい。

	A	B	C
作者名			
作品名			

二 AとCのそれぞれについて、文体や手法（視点や語りなど）の特徴・性格を説明しなさい。文学史的意義に関する説明でも構いません。

3 文学史

次の日本文学史上の用語(ア)～(エ)について簡潔に説明しなさい。

(ア) 『小倉百人一首』

(イ) 『平家物語』

(ウ) 国木田独歩

(エ) プロレタリア文学